

アメリカ先住民研究と アイデンティティ・ポリテックス

——チェロキー族を「演じる」研究者をめぐる論争を考える

石山 徳子

1) はじめに

アメリカ先住民研究は、1950年代に始まる公民権運動、それにつづき1970年代に展開したレッド・パワー運動による社会変革のうねりのなかで発展した学問分野である。先住民研究の萌芽期を担った研究者や学生は、当時の社会運動に影響を受け、学界の主流を占める白人男性の研究者による歴史観や、有色人種を他者として分析対象とする人類学のあり方に疑義を呈した。

1970年3月、ヴァイン・デロリア・ジュニア (Vine Deloria, Jr.) や、アルフォンソ・オルティズ (Alfonso Ortiz) をはじめとする先住民研究者がプリンストン大学に集まった。彼らは、主体的に先住民研究という学問分野を開拓し、各政府レベルにおける先住民政策に発言権を確保し、アメリカ社会を変えていこうという問題意識を確認した。その後、各地の大学に設置されたアメリカ先住民研究学科は、歴史学、文化人類学、エスニック研究、人種研究といった分野と連携し、多くの研究者を輩出してきた。¹

先住民研究者たちは、先住民族の社会的、歴史的、文化的な経験について、白人男性の研究者が中心になって構築してきたナラティブを、当事者の手に取り戻し、語り直す作業を進めた。研究の担い手や手法は多様化しているが、当事者の声や体験、社会文化的な営みの現場を重視する問題意識は共有されている。それは、この学問分野が社会変革を目指す運動から

生まれたものだからだ。さらに現在は、2007年に設立されたアメリカ先住民・先住民学会 (NAISA) を中心に学際化と国際化が進み、その会員数は年々増加している。2007年に開催された最初の学会に集まったのは350人だったが、現在では毎年、800人から900人が参加している。²

そのいっぽうで、先住民研究学科は多くの大学で危機に直面している。ネオリベラリズムの思想と実践は大学キャンパスを席卷し、人文系の学問に共通する予算不足に加え、実用的、もしくは営利的ではないとされる分野への学生の集まりが鈍いという問題が深刻化している。部族政府の大半は奨学金制度を整え、居留地の若者への教育支援を行っているが、あえて先住民研究を専攻する学生は少数派だ。大学で学んだことを居留地や共同体に還元していきたいと考える先住民のあいだで圧倒的な人気を誇るのは、弁護士になるための法学や、医学を中心にした理系の学問であり、必ずしも先住民研究ではない。その背景には、先住民研究の学位は就職やキャリア形成に不利だと断じる昨今の風潮もある。キャンパス内外での逆風にさらされながら、先住民研究に携わる学者たちは、その学問的意義を改めて問いなおした上で、どのような方向転換を図るべきなのか、誰が先住民研究を担うべきなのかを問い直す必要に迫られている。

2015年夏、こうした困難に直面するアメリカ先住民学界を揺るがす事件が、大学キャンパスを拠点に発生した。カリフォルニア大学リバーサイド校で教鞭をとるアンドレア・スミス (Andrea Smith) のエスニック・アイデンティティをめぐるスキャンダルである。先住民女性研究者としての名声を得ていたスミスが、実はチェロキー族出身ではないにもかかわらず、エスニック・アイデンティティを偽ってきたことが白日の下にさらされ、学界に大きな衝撃を与えたのだ。本稿は、この事件を振り返りながら、先住民研究に内在するアイデンティティ・ポリティックスをめぐる諸問題について考察する。

2) レイチェル・ドレザル事件とアンドレア・スミス

2015年6月15日、全米黒人地位向上協会 (NAACP) スポークン支部 (ワシントン州) の支部長を務めるレイチェル・ドレザルが辞任に追い込まれた。ドレザルは、黒人女性として社会・人権運動を牽引し、イースタン・ワシントン大学ではアフリカ系アメリカ人研究の授業を非常勤講師として担当していた。彼女の両親が突然、自分たちは白人であると暴露したのであった。

白人女性であるはずのドレザルが、髪を縮らせ、肌を焼き、黒人になりすました上で、NAACPの支部長まで務めていたというニュースを、多くの新聞、雑誌、テレビ番組が次々に取り上げた。³ ドレザルは発覚当初、自分は黒人であると認識しながら育ち、黒人のアイデンティティを維持する権利を有しているという主張を繰り返していたが、同年11月の『タイム』誌上で白人として生まれたことを認めた。⁴

ドレザルの事件が話題になった直後、かねてからアメリカ先住民研究の学界で噂が飛び、先住民関連のメディアとして有名な『インディアン・カントリー・トゥデイ』では2008年から報道されていた、アンドレア・スミスのエスニック・アイデンティティ疑惑がにわかに注目を集めた。⁵ そのきっかけを作ったのが、南シャイアン族出身でイースタン・ワシントン大学の大学院生アニタ・ルチェッシ (Annita Lucchesi) がアップした、「アンドレア・スミスはチェロキーではない」と題されたブログ記事である。⁶ スミスがチェロキー・アイデンティティを詐称している件は、一部のアメリカ先住民研究者や運動家のあいだでは以前から噂になっていた。ルチェッシはこれを認めたくえて、スミスがチェロキー族とは何のつながりもないこと、有色人種女性、もしくは先住民女性のアイコンとして多くのイベントに参加してきたこと、居留地、部族大学、部族による文化イベントを避けていること、学界外の先住民との関係が希薄であることを厳しく糾弾した。その後、この事例に関する情報提供を目的とする、匿名ホームページ“Andrea Smith is not Cherokee” (「アンドレア・スミスはチェロキーではな

い)が開設された。⁷

6月30日には、ニュース・サイト大手の『デイリー・ビースト』が、ブログ記事や匿名ホームページに言及し、部族政府関係者やチェロキー族出身の研究者にも取材を行い、「アメリカ先住民版レイチェル・ドレザル」を批判する記事を発表した。⁸ここでは、チェロキー族出身の研究者として情熱的に語る講演会の動画や、1991年に執筆した『Ms. マガジン』の記事にリンクが張られ、スミスが先住民女性としてのアイデンティティを存分に利用しながら名声を手にした経緯、及び先住民文化を都合よく使おうとする白人を厳しく批判する立場をとってきたことがあきらかにされている。こうした報道にたいして、スミスは7月9日、「わたしは、これまで常にチェロキーであったし、これからも常にチェロキーでありつづける」という声明を発表した。⁹ スミスの擁護派は、彼女の学問的、社会的な貢献を讃えると同時に、「アイデンティティを監視」しようとする動きを非難している。¹⁰

先住民研究、人種・エスニック研究、ジェンダー・セクシュアリティ研究で大きな成果をあげ、名門大学の終身雇用権を有する学者が、偽りの人種・エスニック・アイデンティティを使用していたことが暴露され、チェロキー系の三部族政府がいずれも否定するなかで、本人は今も自分はチェロキーであると主張し続けている。この事象は学界、そして先住民研究者のあいだではおおいに注目されている。しかし一般社会においては、主要メディアがほとんど報道しなかったため、ドレザルのスキャンダルのようなインパクトはなかった。

3) アンドレア・スミスの経歴

アンドレア・スミスは、ハーバード大学で比較宗教学の学士号、ユニオン神学校で神学の修士号を取得後、2002年にカリフォルニア大学サンタクルーズ校意識の歴史プログラムで Ph.D. の学位を修めた。その間も先住民女性が直面する性暴力の問題に、レイプ・カウンセラーとして取り組み、

2000年には *Incite! Women of Color Against Violence* (立ち上がれ! 暴力に反対する有色人種女性の会) の創設に関わり、同団体で中心的な役割を果たしてきた。先住民女性の人権を守り、性暴力に抵抗する社会運動への貢献が認められた結果、2005年のノーベル平和賞の候補にも挙がった。

スミスはこの間、数々の著書や論文を次々に発表している。2005年に出版した *Conquest: Sexual Violence and American Indian Genocide* (『征服 性暴力とアメリカン・インディアンのジェノサイド』) は話題を呼び、さまざまな大学のアメリカ研究やエスニック研究の授業のテキストとして採用されている。¹¹ 初版の著者紹介欄には、彼女がチェロキー・ネーション・オブ・オクラホマのメンバーであると書かれている。¹² 2008年には、博士論文をもとにした学術専門書 *Native Americans and the Christian Right: The Gendered Politics of Unlikely Alliances* (『アメリカ先住民と宗教右派 ありそうもない連帯のジェンダー化された政治』) が出版された。¹³ その後、2014年に、*Theorizing Native Studies* (『先住民研究を理論化する』)、2015年に *Native Studies Keywords* (『先住民研究のキーワード』) を共編著者として出版するなど、アメリカ先住民研究の新たな地平を開く重要な仕事を行っている。¹⁴

社会運動の現場に参加しながら一流大学に拠点をもち、研究・出版活動に邁進するスミスは、アクティビスト・スカラーの代表格とあってよい。彼女は大学院生時代から現在に至るまで、競争率の高い奨学金や研究費を多数獲得し、大学、学会、集会等の招待講演や基調講演もこなしてきた。その際に彼女は、アメリカ先住民女性、有色人種女性、チェロキー族出身の研究者という肩書きを使用している。前述の匿名ホームページ“*Andrea Smith is not Cherokee*”は、彼女がチェロキー族やアメリカ先住民のアイデンティティを使用した数々の講演のうち主要なものをいくつか挙げている。直近の例としては、カリフォルニア大学パークレイ校で2014年12月11日に行った講演があるが、そのイベントの広報も、彼女を「チェロキー女性」と紹介していた。¹⁵

ただし、学界全体がスミスを高く評価してきたわけではない。彼女が専

任講師として勤務していたミシガン大学は2008年、終身雇用の権利を有する准教授への昇格を拒否した。同大学でスミスが所属していたアメリカ文化研究と女性学の二学科のうち、前者は昇格を認めたが、後者は拒否する決断を下したのである。彼女を支援する大学院生や研究者は、これをアメリカ先住民女性への人種差別であると主張し、ミシガン大学側に見直しを求め、大規模な署名活動を全米各地、そして世界中で展開した。¹⁶この時点でスミスは、自らの雇用を守るために、チェロキー族のアイデンティティ、より広く言えば、いわゆる「人種のカード」を利用したのである。高等教育情報サイトとして有名な『インサイド・ハイヤー・エデュケーション』は3月10日、ミシガン大学の決断に懸念を表明し、「チェロキーである彼女は、一流研究機関に身を置く数少ないアメリカ先住民研究者のひとりである」と明記している。¹⁷結局ミシガン大学が決断を翻すことはなく、スミスはその後カリフォルニア大学リバーサイド校に終身雇用権を有する准教授として移籍し、現在に至っている。

4) チェロキー族、及びチェロキー族出身研究者たちによる主張

チェロキー族は、スミスの主張を認めていない。チェロキー族はもともと南東部、現在のジョージア、テネシー、ノース・カロライナ、サウス・カロライナ諸州に居住していたが、1830年代に施行されたインディアン強制移住政策により、一部はオクラホマ州に移動を強いられた。現在、ノース・カロライナ州に拠点を置くイースタン・バンド・オブ・チェロキー、及び、オクラホマ州のチェロキー・ネーションとユナイテッド・ケトワ・バンド・オブ・チェロキー・インディアンの3部族がそれぞれ自治権を有する部族国家を形成している。スミスは、いずれの部族にも所属していない。

連邦政府に承認された部族は、全米に567存在しているが、チェロキー族の知名度は一般のアメリカ人のあいだで圧倒的に高い。そのせいか、根拠なくチェロキーの血筋を引いていると主張するアメリカ人は、著名人も

含め多く存在している。インディアナ大学で教鞭をとるチェロキー・ネーション出身の法学者スティーブ・ラッセル (Steve Russell) は、この現象と、先住民族の歴史にたいする無知やステレオタイプの蔓延、ニュー・エイジ文化を背景に生まれたワナビー (なりたがりや) の増加との接点を指摘し、スミスはこれを体現する存在であると批判した。¹⁸

部族側は、20年以上前からスミスの動向を把握していた。自らもチェロキーであり、チェロキー・ネーション政府の職員である系図学者、デイビッド・コーンシルク (David Cornsilk) によれば、1990年代にスミス自身が彼に接触を図り、自分とチェロキー族との血縁関係の調査を依頼した。多くの部族は、正式なメンバーとして承認されるためには、一定の割合の「血筋」が認められなければならないといった規則を設けている。しかしチェロキーの3部族については、血筋の割合に関する規定はなく、部族員の血筋の割合は4/4から1/8192まで幅広い。コーンシルクによる調査により、スミスはどの部族とも全く血縁関係を有していないことが示され、本人にもこれが通知された。¹⁹ ベーコン・カレッジのアメリカン・インディアン研究学科で教鞭をとるパティ・ジョー・キング (Patti Jo King) によれば、チェロキー政府職員が2007年にスミスと面会したとき、彼女は謝罪し、今後はチェロキー族を名乗らない旨約束を交わした。²⁰ ところがスミスは、系図調査の結果や、部族政府職員やチェロキー族研究者による再三の要請にも関わらず、この部族のアイデンティティを使用しつづけた。²¹

5) 先住民研究とアイデンティティ・ポリティックス

先住民女性をはじめとする有色人種の共同体にたいするさまざまな暴力、植民地主義とジェノサイドについて、痛烈な批判を繰り返してきた著名な女性研究者が、実は人種、エスニシティを偽っていたという事件は、スミス個人のアイデンティティ・クライシス、名誉欲、キャリア形成の問題にとどまらず、学界、アメリカ社会全体に重要な問題を投げかけている。一連の経緯からは特に、彼女はいったい誰なのか、先住民になりすまそうと

したのはなぜか、先住民研究を担うべきは誰なのかという問いが浮かび上がってくる。

まず一点目が、彼女は何者なのかという問題だ。スミス自身は自分がチェロキーであると述べるが、具体的な根拠を示していない。チェロキー族専属の系図学者であるコーンシルクによる調査結果、そしてチェロキー族内から彼女は自分たちとつながりがあるといった声が全くないという点から、彼女の主張の信憑性は低い。²² 7月17日付の『インディアン・カントリー・トゥデイ』は、チェロキー族の女性研究者5人それぞれによる声明を掲載した。スミスと直接面識のない研究者も含まれているが、いずれも彼女はチェロキー族ではないと明言し、偽りのアイデンティティにたいする深い怒りを表明している。彼女と個人的な付き合いがあり、研究活動に協力してきた女性は、スミスがチェロキー族のどの家族や共同体と実質的なつながりがあるのか、よくわからないままであったと思い返している。植民地主義の歴史を生き抜いてきたチェロキーの女性たちは、自分たちが誰であるのかを認識しているのだと指摘したうえで、「アンディ、あなたは誰なのですか?」と問いかけている。²³ 自治権を有する部族政府、共同体、個々の部族員のいずれも彼女をチェロキー族であると認めず、先住民族のアイデンティティの根幹ともいえる土地基盤との社会文化的なつながりもない状態で、部族への帰属を主張しても説得力はない。

次に、スミスが先住民であると主張しつづけるのはなぜかという問いも重要だ。まず、スミスが1991年に発表した『Ms. マガジン』の記事「前世でインディアンだった皆さんへ」と題された記事で、彼女自身が記している内容を紹介したい。スミスによれば、ニュー・エイジ運動を背景に、多くの白人フェミニストが先住民族の伝統的なスピリチュアリティに癒しを求め、さらには商業的な利益を得ようとしてきた。さらに彼女は、白人の「フェミニスト」が歴史的に他者を抑圧し、地球を破壊してきたと自覚するとき、彼女たちのあいだにインディアンになりすまそうとする動きが生まれると指摘する。スミスは自らを、苦しみつづけてきた先住民女性の

ひとりとしてとらえ、「私たちには自分たちのスピリチュアリティを教える義務はない」、女性同士の連帯の可能性を、白人フェミニストによる「人種差別と利益追求」が阻んでいると断じている。²⁴ 現在の論争に照らしてみれば、スマスが20年以上前に書いたエッセイを、彼女自身による痛烈な自己分析と捉えることもできる。

自分はチェロキーなのだと主張し続けているスマスは絶対に認めないであろうが、彼女の行動をアメリカ史に綿々とつづく、白人が先住民のふりをするワナビ現象に当てはめることも可能だ。フィリップ・デロリア (Philip J. Deloria) が1999年に発表し、学界内外で大きな注目を集めた著書 *Playing Indian* (『先住民を演じて』) は、ボストン茶会事件、ボーイスカウト、ニュー・エイジに至るまでの多様な場面で、多くの白人が先住民のまねごとを繰り返してきた歴史を振り返っている。²⁵ 先住民を演じる行為を通じて、アメリカ人は先住民のアイデンティティと自らを重ね合わせる、もしくはその「野蛮性」を他者化し、国家としてのアイデンティティを構築したという議論だ。シャーリー・ハンドーフ (Shari M. Huhndorf) もまた、ワールド・フェアや映画を例に、ヨーロッパ系アメリカ人のアイデンティティ形成と、先住民の文化的なイメージがいかに関連しているのか、そしていかに無垢な動機であれ、社会的な差別構造や不平等な力関係の強化につながってきたのかを示した。²⁶

スマスの事件をこのような歴史的な文脈に置いてみるならば、彼女が社会的な不正義と闘うアクティビスト・スカラーとしての「先住民女性を演じる」ことによって、先住民女性研究者の奨学金や研究費、または就職や招待講演の機会が失われ、結果的には教育と研究の現場における人種による不平等が強化されたという解釈も可能だ。2015年7月7日付の『インディアン・カントリー・トゥデイ』に掲載された、米国各地のさまざまな部族出身の先住民女性研究者による共同声明は、「先住民を演じる」行為は、歴史的に先住民の土地の収奪と連動してきたという分析は重要だ。彼女たちの議論によれば、先住民が消滅している、もしくは既に消滅したとい

う支配的なナラティブと、スミス等による「先住民を演じる」行為にはあきらかな相関関係がある。²⁷ スミスが先住民女性になりすまし、偽りの当事者として、偽りのナラティブの生産を繰り返しながら、学界で確固たる地位を確保することは、植民地主義的な強奪のプロセスにも通じる。先住民研究の分野の理論化に貢献する貴重な仕事をしてきたのだから目をつぶるべきだという議論は、歴史背景を無視したものである。

最後に、先住民研究を担うべきなのは誰なのかという問題について考えてみたい。先住民であってもなくても、研究者は自身のアイデンティティと、その政治的、文化的、歴史的な意味合いを自覚し、正直であることが重要だ。NAISAの公式ホームページは、2015年9月15日、先住民になりすます行為に関する学会理事一同の見解を発表した。具体的な言及はないものの、これがスミスの事例を念頭に置いて書かれたものであることは確かだ。この声明は、先住民のアイデンティティの問題が、何百年間にもわたりつづき、現在も進行中の植民地主義によって複雑化していると明言する。つまりアイデンティティ詐称の問題を、植民地主義的暴力の一部として捉えているのだ。学会理事たちは、先住民研究に携わる学者は、自らのアイデンティティや、研究対象とする、もしくは協力関係を築く共同体にたいして誠実であるべきだという原則を改めて提示している。²⁸ そのいっぽうで、アメリカ先住民研究、もしくは広く先住民研究を専門とする学者が先住民でなくてはならないなどということは断じてないとする立場を明確に示している。NAISAには先住民ではない研究者を周縁化する意図はなく、自分のアイデンティティやその社会的、学問的な位置づけと意味について正直でなければならないという主張だ。

研究者が自らの出自やアイデンティティを偽るべきではないという、倫理的、社会的に極めて当たり前のことを、学会側があえて公式ホームページで確認しなければならない状況は、先住民研究、そして先住民の共同体の多くが、現在に至るまで抱える諸問題を象徴している。アメリカ先住民研究やエスニック研究はもちろん、人類学、社会学、歴史学、地理学の分

野でも、現場のフィールドにおいて、研究者は常に自らのアイデンティティと向き合わねばならない。内部の人間だからこそ聞ける話や、収集し、理解することのできる情報もあれば、外部からやってきて、共同体でのしがらみから自由な立場だからこそ見えてくるものもある。だからこそ研究者は、自らの人種、民族、階級、ジェンダー、セクシュアリティといった背景が、フィールドにおけるアイデンティティ・ポリティックスや、そこで得られる知見から無縁のものではないことを認識し、正直であるべきなのだ。スミスによる行為はこれに逆行するだけでなく、植民地主義の歴史を背景にした先住民に関する知識の歪みを再生産するものでもある。彼女の研究も、こうした歪みのなかで形成されてきたという認識も必要だろう。

カリフォルニア大学ロサンゼルス校の教授職にあり、スミスとは博士課程の同窓生だったデイビッド・ショーター (David Shorter) が、『インディアン・カンントリー・トゥデイ』に投稿した記事は、次の文章ではじまる。「私はインディアンではない。それでよいのだ」。ショーターは、スミスの業績や知的、社会的なネットワークが、チェロキー族の女性であるというアイデンティティによるものだったのであれば、周囲の研究者たちもまた、その経緯や仕組み、自らの学問にたいする姿勢を振り返り、検証する必要があるだろうと述べる。²⁹ たしかに、研究者個人の学問や現場への向き合い方、研究にたいする評価方法、研究者のアイデンティティ・ポリティックスと学問的、社会的知識の生産プロセスの関係について分析すべきことが多く残されている。

6) 先住民研究のこれから——結びにかえて

アンドレア・スミスのアイデンティティをめぐる論争は、アメリカ先住民研究という学問分野が抱えるさまざまな問題を浮き彫りにした。まずは、研究者自身のアイデンティティと先住民研究が生み出す知見との関係性、さらには研究者と先住民の共同体との向き合い方や、学界、及び教育の現場での知識の共有のあり方について、改めて問い直す必要がある。その

作業においては、どのような社会的、政治経済的、文化的なコンテキストのもとに、誰が、いかなる手段を用いて先住民族の経験について学び、ナラティブを紡ぎ、世に問いかけていくべきなのか、そして先住民研究はどのように評価されるべきなのかも検証することが必須であろう。

先住民の学界やメディアがこの事象を重く受け止めているいっぽうで、アメリカの主要メディアがほとんど注目しなかったという点も指摘しておきたい。レイチェル・ドレザルの事件に関する報道との違いはあからさまだった。「先住民を演じる」行為があまりにも一般化されているため、著名な研究者による偽りのアイデンティティの使用という衝撃的な事件があまり問題視されなかったのかもしれない。アメリカ先住民族は既に消滅しているという大きな誤解が社会に根深く存在し、人びとは、実際に居留地の周辺で生活しない限り、今を生きる先住民が日々どのような問題に直面し闘い続けているのか、どのような悲しみや喜びを感じているのかを知ることが、理解することもできない。先住民族の社会的な周縁化と孤立が、誰もが先住民を名乗れるような文化的な素地を作り出しているのだ。

スミスの事件を振り返ると、アメリカ先住民研究が担うべき社会的な役割と責任といったものがみえてくる。個々の研究者は自らのアイデンティティがもつ学問的、社会的意味を認識した上で、先住民研究に誠実に向き合い、植民地主義の歴史と現在、そして先住民族の経験について、広く発信していく必要がある。

註

1 Russell Thornton, ed. *Studying Native America: Problems and Prospects*. (Madison: University of Wisconsin Press, 1998)

2 Native American and Indigenous Studies Association (NAISA), “Greetings, and Welcome to the Native American and Indigenous Studies Association!” (<https://naisa.org>)

3 Greg Botelho, “Ex-NAACP Leader Rachel Dolezal: ‘I Identify as Black.’ CNN (June 17, 2015) (<http://edition.cnn.com/2015/06/16/us/washington-rachel-dolezal-naACP/>)

J. Freedom du Lac, Abby Ohlheiser, “Rachel Dolezal, ex-NAACP Leader: ‘Nothing about being Describes Who I am.’” *The Washington Post*. (June 16, 2015) (<https://www.washingtonpost.com/news/morning-mix/wp/2015/06/16/rachel-dolezal-i-identify-as-black/>)

Kirk Johnson, Richard Perez-Pena, John Eligon, “Rachel Dolezal, in Center of Storm, is Defiant: ‘I Identify as Black.’” *The New York Times*. (June 16, 2015) (http://www.nytimes.com/2015/06/17/us/rachel-dolezal-nbc-today-show.html?_r=0)

4 Sam Frizell, “Rachel Dolezal: I was Born White.” *Time*. (November 2, 2015) (<http://time.com/4096959/rachel-dolezal-white/>)

5 Steve Russell, “When does Ethnic Fraud Matter?” *Indian Country Today*. (April 4, 2008) (<http://indiancountrytodaymedianetwork.com/2008/04/04/russell-when-does-ethnic-fraud-matter-79578>)

6 Annita Lucchesi, “On Rachel Dolezal, Andrea Smith, & Going Viral.” (n.d.) (<http://nitanahkohe.tumblr.com/post/122908771423/on-rachel-dolezal-andrea-smith-going-viral#122908771423>)

7 Anonymous, “Andrea Smith is Not Cherokee.” (n.d.) (<http://andreasmithisnotcherokee.tumblr.com>)

8 Samantha Allen, “Meet the Native American Rachel Dolezal.” *The Daily Beast*. (June 30, 2015) (<http://www.thedailybeast.com/articles/2015/06/30/meet-the-native-american-rachel-dolezal.html>)

9 Andrea Smith, “My Statement on the Current Media Controversy.” (July 9, 2015) (<https://andrea366.wordpress.com/2015/07/09/my-statement-on-the-current-media-controversy/>)

10 Various Authors (a), “Against a Politics of Disposability.” (n.d.) (<https://againstpoliticsofdisposability.wordpress.com>)

11 Andrea Smith, *Conquest: Sexual Violence and American Indian Genocide*. (Brooklyn: South End Press, 2005)

12 本書は2014年のサウス・エンド・プレス社の倒産後、デューク大学出版によって版を重ねている。

13 Andrea Smith, *Native Americans and Christian Right: The Gendered Politics of Unlikely Alliances*. (Durham: Duke University Press Books, 2008)

14 Audra Simpson and Andrea Smith, eds., *Theorizing Native Studies*. (Durham: Duke University Press Books, 2014).

Stephanie Nohelani Teves, Andrea Smith, Michelle Raheja, eds., *Native Studies Keywords*. (Tucson: University of Arizona Press, 2015)

15 Anonymous.

16 複数の学会のメーリング・リストや、研究者仲間からの連絡を受け、当時、筆者自身も署名を行った。

17 Paul Jaschik, “Fake Cherokee?” *Inside Higher Education*. (July 6, 2015)
(<https://www.insidehighered.com/news/2015/07/06/scholar-who-has-made-name-choerokee-accused-not-having-native-american-roots>)

18 Steve Russell, “Rachel Dolezal Outs Andrea Smith Again: Will Anybody Listen This Time?” *Indian Country Today* (July 1, 2015)
(<http://indiancountrytodaymedianetwork.com/comment/2155105>)

19 David Cornsilk, “An Open Letter to Defenders of Andrea Smith: Clearing Up Misconceptions about Cherokee Identification.” *Indian Country Today*. (July 10, 2015)
(<http://indiancountrytodaymedianetwork.com/2015/07/10/open-letter-defenders-andrea-smith-clearing-misconceptions-about-choerokee-identification>)

20 Various Authors (b), “Cherokee Women Scholars’ and Activists’ Statement on Andrea Smith.” *Indian Country Today*. (July 17, 2015)
(<http://indiancountrytodaymedianetwork.com/2015/07/17/choerokee-women-scholars-and-activists-statement-andrea-smith>)

21 Ibid.

22 Cornsilk.

23 Various Authors (b).

24 Andy Smith, “For All Those Who were Indian in a Former Life.” *Ms. Magazine*. (November/December 1991): 44–45.
(http://www.csworkshop.org/pdfs/CARC/Overview/4_For_All_Those.PDF)

25 Philip Deloria, *Playing Indian*. (New Haven: Yale University Press, 1999)

26 Shari M. Huhndorf, *Going Native: Indians in the American Cultural Imagination*. (Ithaca: Cornell University Press, 2001)

27 Various Authors (c), “Open Letter from Indigenous Women Scholars Regarding Discussions of Andrea Smith.” *Indian Country Today*. (July 7, 2015)
(<http://indiancountrytodaymedianetwork.com/2015/07/07/open-letter-indigenous-women-scholars-regarding-discussions-andrea-smith>)

28 NAISA, “NAISA Council Statement on Indigenous Identity Fraud.” (September 15, 2015) (<http://www.naisa.org>)

29 David Shorter, “Four Words for Andrea Smith: ‘I’m Not an Indian.’” *Indian Country Today* (July 1, 2015)
(<http://indiancountrytodaymedianetwork.com/2015/07/01/four-words-andrea-smith-im-not-indian>)

以上のインターネット資料に関しては全て、2016年1月21日に筆者が掲載を最終確認。